

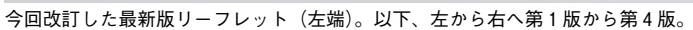
今年6月26日から10月6日まで、名古屋市美術館は改修工事のため休館しました。近年、日本各地の美術館で建て替えや移転、全面改修などの大規模工事による長期休館が目立っていますが、当館の改修では展示室壁面の張替のほか、正面玄関に向かうアプローチ部分に敷かれたタイルの張替、建物の南側にある遊歩道の舗装などを行いました。特に正面玄関側の白いタイルは濡れると滑りやすい素材で、雨の日は転倒の危険度が高く、利用者の皆さまにもご不便をおかけしてきましたが、ようやく改善することができました。

工事期間中も、一時避難させた屋外彫刻のメンテナンスや再オープン後の展覧会の準備、館外での教育普及事業など、美術館職員

は開館時と変わらず忙しく動き回っていました。そんな中、取り組んだ仕事の一つに「名古屋市美術館 周辺の彫刻」という印刷物の改訂作業があります。開館間もない頃から作成している刊行物でリピーターの方々にはお馴染みと思いますが、10数年ぶりのリニューアルにあたり「誰（何）を中心にして物事を考えるか」を特に強く意識しました。今回はこの仕事の一部始終を紹介したいと思います。

●目的の確認

改訂の手始めに取り掛かったのは、リーフレットを作成する目的の確認です。これまで4度も作成してきた印刷物の目的など、今さら確認するまでもないと思われるかもしれま



せん。しかし、下調べを続けるうちに心に引っ掛かるものが少しずつ増えていくのです。ただ、美術館における教育普及活動への認識が今ほど一般的ではなかった約30年前に、屋外展示物を紹介する刊行物を発行することの意味合いは、現在と大きく異なるのかもしれませんが。当時を知らない者には想像することしかできませんが、改めて2017年という社会の中で美術館に求められるものを考え、誰のため、何のために作成するのか。最初に考えを整理することで、以前のリーフレットから踏襲する事項と、変更を必要とする事項の仕分け、変更に伴って発生する作業などの見通しを立てようと考えました。

その一環として、過去に屋外彫刻や建築に関するツアーを担当したことのある当館ボランティアとの意見交換の場を設けました。毎年10月名古屋まつりと連動した常設展無料開放日に、美術館ではボランティアによる特別企画として彫刻ツアーや建築ツアーを不定期に開催しています。ただ、残念ながらツアーに参加した方へのアンケートなどは取っておらず、来館者からどのような反応を得られたか美術館は詳細に把握していませんでした。そのヒアリングも含め、どのような内容の印刷物であればツアーを実施していないときガイドの代わりになり得るか、将来的なツアーとの共存のあり方も見据えて、忌憚のない意見を聞く必要があると考えたのです。

ボランティアからは従前のリーフレットについて「地図が分かりづらい」「作品の解説文が地図や作品図版の真裏に印刷されており、両者を突き合わせながら見ることができない」「作品につけられた番号順に見て回ろうとすると、公園内を何度も行き来する羽目になる。何を基準につけた番号なのか？」¹⁾

など、使い勝手の悪さや客観性の欠如を次々と指摘されました。実際に来館者へ作品を紹介するときに感じたこと、気になったことを伝えているだけあって、納得のいく内容ばかりです。

熱心なメンバーは、国内外を問わず美術館や博物館、観光地を訪問した時にもらったガイドマップやリーフレットのうち、デザインや使い勝手がよいと思ったものを打合せの場に持って来てくれ、旧版と比較しながら改善が必要と思われる点を具体的に確認することができました。参照した海外館の屋外彫刻マップでは、簡略化した地図上に作者名、作品名、制作年と作品図版が余白を利用して配置されており、解説はどこにも見当たりません。館のホームページにある作品アーカイブを参照するよう促すものもありました。当館の旧版とこれらを比較すると、それまで気にならなかった解説の多さが目につき、見方によっては、本来楽しむために用意されたリーフレットが、見る側に自由に鑑賞する余地を与えていないのでは？とさえ感じました。人々が作品鑑賞に求めるものはさまざまです。教養や知的好奇心を高めたい方も、散策のついでや気晴らしに楽しみたい方もいます。どちらか一方に加担するというのではなく、美術館として提供すべき最低限の情報はおさえつつ、適切な分量を見極めようと心がけました。

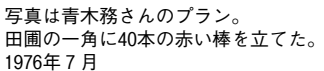
作品解説は、他のさまざまな課題ともリンクします。作品情報を提供することは学芸員の大切な仕事ですが、従前のテキストは展示室内の解説パネルと同様に表現が硬く、専門的で、気軽に読めるとは言い難い内容でした。解説の難しさによって作品への興味が削がれてしまっは、美術館の活動として本末転倒

8月に富山県美術館が全面開館しました。富山県には1981年に開館した富山県立近代美術館がありましたが、こちらは昨年末の2016年12月28日に閉館となり、所蔵作品と学芸員などの職員を引き継いで、名称だけでなく場所と建物、そして活動内容を新たにしての開館となっています。

1階の企画展示室と2階の常設展示室を貫く九天井を頂く円形の吹き抜けに特徴があった以前の建物と比べると、内藤廣設計の新しい

い美術館は、環水公園に面した東側がガラス張りになっているなど、より明るく軽やかな趣となっています。世紀が変わり、建築の理念や技術、素材が新しくなっていることが、近年新たに作られた美術館を見ているとよく分かります。余談ですが、名古屋市美術館のある伏見地区でもビルの建て替えが進んでおり、こうした新旧の対比を見ることができます。

1970年開館の兵庫県立近代美術館も2002年に現在の場所に移設開館する際に名称から「近代」がなくなり、兵庫県立美術館となっています。兵庫のときは、「近代」がなくなることについて感想や意見がいろいろと交わ



されていたことを記憶しています。日本で最初に「近代美術館」を名乗ったのは、1951年開館の神奈川県立近代美術館です。鎌倉の地であって、「鎌近」と親しみを込めて略称されたこの美術館も創設の鎌倉館が昨年(2016)年3月31日に閉館となりました。2003年に葉山館が新設されて以降、「神奈近」と略称されることが多くなった神奈川県立近代美術館からは、名称から「近代」がなくなることはありませんでしたが、日本の近代美術史を美術館という現場から形成して行くことを牽引してきた鎌倉館の閉館には、「近代」という言葉が美術館の名称から消えることと並ん

で、ひとつの時代が終わったという印象がありました。

ささいなことです。兵庫は「県立」が残
り、富山は「県」となっています。二館の移
設を隔てる15年のあいだに、自治体直営の公
立美術館のいくらかは財団や指定管理者が運
営するものへと変わってきています。将来の
見通しが立てにくいなか、余地を残すという
意味では「立」を伴わない方が望ましいのか
もしれません。名前ひとつにも考えることは
あるようです。(み。)

です。また、開館した1988年に比べると、障がい者、小さな子どもとその保護者、高齢者、日本語を母語としない人々など、より多様な人々が美術館の利用者として意識されるようになってきています。ボランティアの実施する彫刻ツアーにも、親子連れの利用者が多く参加していました。文章の平易さ、理解しやすさと並行して、文字の大きさ、判読のしやすさ、図式や記号を効果的に併用した視覚的なアプローチなど、少しでも多くの利用者にとって分かりやすい物であるよう配慮を試みました。観音折のリーフレットを広げると、分かりやすい地図と作品図版が一望でき、いずれか一片を折り曲げれば解説も同時に見られるレイアウトは、デザイナーとの意見交換によって生まれたものです。

●公園の歴史を振り返る

「名古屋市美術館　周辺の彫刻」は、少なくとも過去に4点、補遺として挟み込む1枚刷りが1点作成されています。最初の発行が1990年頃、今回の改訂以前で最も近年に改訂されているのが2002年（2005年に重版）、およそ2～3年に1回の頻度で改訂を行ったことになり、開館から15年程度は屋外設置作品が定期的に増えていった様子がうかがえます。最初のリーフレットには所蔵作品のみが掲載されましたが、名古屋市農政緑地局（現在の緑政土木局）が1995年度から行った事業「白川公園・彫刻の散歩道」の一環で設置された作品群が加わると、用紙もひと回り大きくなりました。作品図版と解説文、設置場所を示す地図、という構成要素は基本的に同じですが、レイアウト、使用する書体など、少しずつデザインを変えています。

過去のリーフレットには、園内に存在しているのに掲載されなかった作品があります。2002年以降新たに所蔵・設置した作品

に関しては改訂が滞っていたのでやむを得ませんが、若宮大通りに面した公園南側にある高藤鎮夫²《花の精》と、科学館前の噴水に寄り添うように建つ今井瑾郎³《イメージ・ウォール「円・景」》の2点は、美術館が開館する1988年より前から設置されていたにも関わらず一度も紹介されていません。掲載を見送った経緯は不明ですが、美術館の建設は白川公園の再整備と密接に関わっており、当時の関係者が「美術館建設に伴って新たに設置された作品を広く周知するための印刷物」と定義した可能性はあります。

とはいえ来年で開館から30年、当時のように作品の新旧を厳密に区別する意味は薄れつつあります。設置者や設置年など正しい情報や物事の経緯を把握し記録することも任務ですが、今の白川公園を利用する人々にとって、特定の作品だけ掲載されないことはかえって不自然に感じられるのではないのでしょうか。作品に興味を持った人々の「知りたい」に応えるのが本来の姿であろうと考え、作者と作品名が判明している作品はできる限り掲載することにしました。

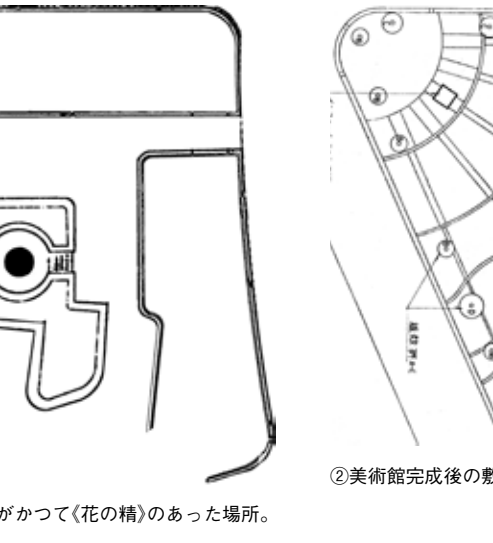
なお、この件を調べる中で美術館建設時の図面を確認したところ、《花の精》の移設工事に関わる資料を見つけ、以前建っていた場所は現在のサンクンガーデンの植え込みあ

種になります。高額な美術品に対する保険料は、当然高額になり、展覧会の予算に大きな影響を与えます。保険料は、展覧会の会期の長さ、会場数、移動距離、展示する国の治安等、様々な条件によって大きく変動しますが、一つの目安として数字をあげると、100億円の作品であれば、およそ1千万円の保険料を支払わなければなりません。つまりダ・ヴィンチの《救世主》を展覧会に出品しようとするれば、保険料だけで5千万円もの予算を用意しなければならないということです。

ダ・ヴィンチやピカソの展覧会を開催するわけでもなくとも、オークション全体が高騰に向かえば、それに引っ張られて他の作品の評価額も当然上昇し、あらゆる展覧会の経費を圧迫するようになります。私自身の経験でも、これまで所有者が出品を了承してくれながら、保険評価額を聞いて断念せざるを得なかったことは一度や二度ではありません。質の高い作品ほど、当然評価額も高くなるわけで、その無念さは倍増することになります。さらに展覧会における美術品の事故の確率の低さを思うと、無念さは虚しさにまで変化していきます。

このような状況を打破し、優れた展覧会と美術品を一人でも多くの国民に提供するための制度として、国による美術品の補償制度が平成23年度から設けられています。欧米各国の先進的な制度を取り入れたものですが、近年の美術品の高騰はこの制度も置き去りにするほどの凄まじさです。一般の方にとっては、なんとも景気のいい、浮世離れたオークションのニュースも、美術館勤めの学芸員にとっては、うんざりする悪夢のような話題なのです。（F）

めています。1994年に開催した回顧展「モネ展」を皮切りに、モネの代名詞ともいえる睡蓮を中心に紹介した2002年の「モネ　睡蓮の世界展」。「印象派」の名前の由来となったマルモッタン美術館所蔵の《印象　日の出》が特別出品された、2008年の「モネ　印象日の出」展など、すでに三度にわたってモネの作品を紹介しています。そして今回四度目の展覧会として開催するのが「モネ　それからの100年」です。「それからの100年」とは、1926年にこの世を去ったモネが、現在オランジュリー美術館を飾る睡蓮の壁画を制作して



たりと分かりました（図面①②参照）。この像を囲むように花壇が整備されていたようです。単に同じ公園内にあるというだけではない、美術館と作品との浅からぬ関わりを調査によって明らかにできたことは収穫でした。

日本では、マスコミが大々的に広報を展開する特別展への関心が高く、美術館のコレクション（所蔵作品）はいつでも見られるからと注目されにくい傾向にあります。しかし、美術作品の価値は見られる機会の希少性だけでは測れません。いつでも見られることの良さを伝えていくことも美術館の大切な役割の一つです。地道な調査や作品のメンテナンスと併せて、常に多様な利用者を意識しながら教育普及活動が続けていきたいと思います。新リーフレットは美術館の総合案内や常設展示室入口などで配布しています。来館の際には白川公園内の散策にご活用いただき、率直な感想をお聞かせいただければ幸いです。（3）

- 確認の結果、設置年順と思しき部分もあったものの、

感想ノートから

異郷のモダニズムー満洲写真全史ー2017年4月29日(土)～6月25日(日)

前号でも紹介しましたが、今春開催した特別展『異郷のモダニズムー満洲写真全史ー』（4/29～6/25）には、全国から数多くの熱心な方々にご来館いただきました。戦後も72年を経過し、当時「満洲国」で生活、体験された人々も少なくなり、今回の展覧会にはそのご子息に当たる方々が、ノートに「感想」を綴ってくれました。「父が戦前関東軍の将校でした。」「私の父は満洲国の役人でした。」という書き出しで綴っていただいた方、あるいは、「私の生まれた国、都市ハルビン」とだけ記された方も居られました。彼地に生まれながら、微かな記憶を確かめるように、ご来館いただいた方もいらっしゃるようです。「間島省延吉で生まれた」という方は、「父母の姿を写真の中に、垣間見る思いでした。」と記してくれました。「満蒙開拓団の団長として渡満し、戦後シベリアに抑留された」方を父に持つ男性は、会場で流していたDVD映像をご覧になった後に一緒に来られた娘さんが発した「満洲へ行こうとしたおじいちゃんの気持ちが今わかった。」という言葉を書き留めてくれました。読ませていただき、ご親族に寄せる皆様の御気持ちに心打たれました。さて、「満洲写真全史」と題して500点を超える作品を展示・紹介いたしました

美術館の便宜上の管理番号として理に適っていないことが分かった。今回の改訂では利用者の観点を最優先に考え、地図上で公園を左右（東西）に大きく二分し、それぞれに上（北）から下（南）、左から右へ向かって、一連の流れに沿って見られるよう番号を振り直した。2　高藤鎮夫（たかとうしずお／1910-1988）は名古屋に生まれ、加藤鎮清（1894-1966）に師事し、戦前は新文展、戦後は日展を中心に活躍した具象彫刻家。野々村一男、野水信など東海エリアで活動する彫刻家たちで結成された「MC彫塑家集団」でも活動した。市内に設置されている他の作例としては、名城公園に《加藤清正像》、久屋大通公園に《遙か》、東山公園に《光と緑》などがある。《花の精》は中部生花業連合会の寄贈だが、設置経緯の詳細については今後の調査が待たれる。

参考URL：

- 東京文化財研究所アーカイブデータベースhttp://www.tobunken.go.jp/materials/bukko/9917.html
- 名古屋市緑政土木局データベース「彫刻」の項（PDF中の表記でp.102-105、緑地維持課作成）http://www.city.nagoya.jp/ryokuseidoboku/cmsfiles/contents/0000031/31618/2011midori3.pdf
- 今井瑾郎（いまいきんろう／1943-）は長野に生まれ、愛知県立芸術大学大学院（彫刻専攻）修了後、名古屋を拠点に活動が続けている現代彫刻家。白川公園に設置した本作で1986年度名古屋市都市景観賞を受賞している。

なかでとりわけ感想が多かったのが、第一章で上げた『亞東印画輯』の写真でした。

櫻井一郎(1893ー1928)が撮影した写真は、本展覧会が初めての紹介となりましたが、熱心にご覧いただいた方々からは次のような感想が寄せられました。

「櫻井氏の写真はその添えられた文章とともに大変面白く、興味深く見ることができました。」

「文明が“侵入”する以前の支那を見ることができ、大変うれしく思います。添えられた説明書きにも、日本では見ることのできない絶景を眼前にした時の驚きがあらわれており、先人と時をまたいで感動を共有できたような気がします。」

一方で、「説明文の文字が小さい」というご指摘をいただきました。また展示室に設置したタッチパネル・スクリーンの不具合により、皆様にはご迷惑をおかけしました。その他頂戴したご意見ご感想に関しましては、今後の展示に反映させていきたいと考えています。（J.T.）



会場風景

展覧会　現在進行形

モネ　それからの100年

2018年4月25日(水)～7月1日(日)

名古屋市美術館は来年4月で開館から30周年の節目を迎えます。開館記念展の「20世紀絵画の展開」に始まり、日本画、洋画、彫刻、写真、ルネッサンスから現代まで、実に幅広いジャンルと時代の作家・作品を紹介してきました。その中でモネはやや特別な位置を占

からほぼ100年という意味で、モネ畢生の傑作が誕生してから100年の間にどれほどの広範な影響を及ぼしたかを検証するのがこの展覧会の目的です。今では信じられないことですが、モネが没した翌年の1927年に壁画が公開された時、そこを訪れる人の数はまばらで、混沌とも見える睡蓮の池の広がりは、視力を失いつつあった巨匠の空しい白鳥の歌と感じる人が少なくなかったのです。しかし、それから20年余りを経て、第二次大戦後のアメリカとヨーロッパでモネは見事に復活を遂げます。多くの前衛的な作家がモネの革新性に気

づき、自らの創作の手がかりにしようとならためてその作品を見つめ直し、今日に至っています。今回の展覧会ではモネの作品と、ロスコ、ウォーホル、リキテンスタイン、福田美蘭など、彼の作品に影響を受けた、あるいはこの巨匠に敬意を捧げた作家たちの作品を同じ空間に並べ、モネの遺産の広がりとそのインパクトの大きさを検証します。またモネ？　いえいえ、まだまだモネなのです。印象派を超えて21世紀の今も新鮮な喜びと驚きを与えてくれる、この巨人の新たな姿に触れてください。（F）

郷土の作家たち

三岸 節子（みぎし せつこ／1905－1999）

三岸節子は、1905年に愛知県の中島郡起町（現在の一宮市）に生まれました。家は地元の大地主であり、毛織物工場を経営して大変羽振りがよかったといいます。裕福な家に生まれ育った節子でしたが、幼少期から先天性股関節脱臼を患い、家ででの集まりの際には土蔵の中で一人読書していたなど、不遇な面もありました。そのようなところから、節子の反骨精神が育っていったとも言われています。第一次世界大戦後、恐慌のあおりを受けて実家が没落すると、節子は「一家の苦しみを何者かになってとりかえそう。」と決意し、洋画家を目指すことになります。

1921年に上京し、岡田三郎助に師事。岡田は節子に「気品のある絵」を描くように教えたといいます。女子美術学校に編入した節子は、3年生の時、展覧会への出品がきっかけで洋画家の三岸好太郎と知り合います。貧しさの中で真摯に絵画制作に打ち込む好太郎の姿は節子に尊敬の念を抱かせ、二人は結婚します。しかし、好太郎はわずか10年の結婚生活の後に世を去り、節子は3人の子供を抱えながら女性画家として遅く歩むこととなります。その後、洋画家菅野圭介と別居結婚をし、新しい女性の生き方として話題となりました。

した。

独立美術協会、新制作派協会、女流画家協会などで女性画家のパイオニアとして活躍してきた節子は、1954年、初めてヨーロッパに渡ります。その後日本に戻りますが、1968年には再びフランスに渡り、カーニュやヴェロンに住んで風景画を数多く制作しました。彼女はヨーロッパに渡ったことによって風景画家として世に認められる存在となったといえるでしょう。1974年、パリで初めて個展を開いた際は、「花とヴェネチア」と題し、節子の最も愛するヴェネチアの風景が出品されました。

抑えられた色調ながらも底光りするような美を湛えたヴェネチアの風景をはじめとして、骨太で逞しい作品を数多く残した三岸節子は、1999年、94歳で世を去りました。（AN）



三岸節子《ブチカナル》1973年 ©MIGISHI

？歳）
「女性＝スカートという考え方は、今の時代ではあたりまえではないけど、この作品が作られる時は、女性＝スカートだったのかなと少し疑問に感じました。この絵では目と鼻のみしかかかれていないので、表情はどんな感じなのか、見る人のとらえ方で色々な表情にかんじとることができておもしろい作品だと思いました。」（T.さん 20歳）

「『女』というタイトルだが実は右に男が立っている。形のとらえ方が有機的。動きを感じる。女から男への働きかけのような。構図（画面構成）を実に巧みに考えられた作品に思えてきた。」（にゃん吉さん 63歳）
「この女性のことを作者は好きではないと思う。目がオレンジで何考えてるのかわからない。左足のつま先をのばしてポーズきめてるけれどあまりかわいくない。髪の毛かと思ったら全身の輪かくにも生えていて、心臓に毛が生えているよりも肝がすわっていて、図々しくも見えてくる。すごく強い女性だと思う。でもカラフルでおしゃれしていて、10代後半の女の子がもつ変な強さというか、こわいものを知らないというか、純粹すぎる感じもした。あのころの変に強かったころの自分、女性としての魅力を取り戻したくなったのかな。私はそうしたくなった。」（麗子さん 39歳）
「幼い少女のように見える。こくびを傾げて、あどけない。頭部の青さが未熟さや幼さを、黄色の服が活発さと明るさを象徴しているように見える。赤系が多いのに所々に入る青色がさわやかで、温かいが暑くなく、怒りや哀しみといった負の感情につながらない不可思議な絵に思う。」（郁奈さん 27歳）

「明るくて、あたたかい…と思ったけれど、赤色が強めで、単なるあたたかさだけではなく苛立ちや怒りなども含まれているように感じた。もし、感情というものを表現しているなら様々な色が使われているこの作品はとても人間味があると思う。」（夏未さん 19歳）
「一瞬猫のようであり、鮮やかな色にハッとした。作者が女性であり、女性の持つはなやかなイメージと少し複雑な内面を具しよう化している作品だと思った。」（祥さん 27歳）
「人の顔がカクテルグラスに見えてくる。全体に明るい色彩がいい。ナイフのようなものが床につきささっているのがちょっと怖いがよくわからない。」（？さん ？歳）
「布って所にびっくり 染色すごい 楽しそう」（たえこさん 37歳）
「いろんな色があって、カラフルで楽しいかんじがします。あとたてぼうやよこぼうがあって楽しいえだなおもいます。こういう絵はぜんぜんかいたことがないので、一どかいてみようかなと思いました。」（まゆみさん 9歳）

設楽 知昭（したら ともあき／1955－ ）

北海道に生まれ、愛知県立芸術大学に進学し、同大学大学院を修了する。その後愛知県立芸術大学で教鞭をとりながら、現在に至るまで旺盛な制作活動を続け、この地域在住の代表的な作家として活躍している。名古屋市美術館においては「ポジション1994 名古屋発現代美術」展をはじめ、様々な展覧会に出品、作品も収蔵している。

設楽の作品は多岐にわたる。主に絵画を中心とした平面作品が中心であるように思われるのだが、オブジェのような作品やインスタレーション作品など、展示を見るたびに常に作品に新しい要素が加わっていてその作品展開の幅広さにいつも驚かされる。ただし多様な展開の中にも一貫しているのは、彼の作品が人知による創造物であるということを強く意識させる点であり、それは時に科学と芸術が紙一重に結びついていた時代を思い起こさせる。物質的な存在である人間の仕組みとそれをとりまく世界を解明しようとする視線をもちながら、その人間が持つ意識や無意識の中に立ち現れる物質的ではない様々なイメージに形を与えていくようでもある。

最近作が展示された個展「赤い 設楽知昭の絵」（STANDING PINE 2017年9月30日～10月22日）では、まるでキリスト教の祭壇画に描かれている天使のようにウルトラマンのような人々が雲の上にいる姿がフェルトに

描かれた作品に加え、赤い心臓をかたどったオブジェや、顔が描かれた秤のオブジェ、まるで血みどろになった人のように赤い色にまみれた人の形をしたものが詰められたインク壺などが展示されていた。設楽の作品が展示されている風景からはヨーロッパの王侯貴族たちが珍奇な物を集めた「ヴンダーカンマー（驚異の部屋）」を思い起こさせる。そして並べられた様々なものたちは、それらの並びの不可思議さと相俟って物語を紡ぎ出す。その物語はまるで意識と無意識の間にあるイメージがそれぞれ現実の中に侵食して新たな次元の物語にしていこうでもある。会場入り口には《針金と紙でつくった大きな臉》という作品が置かれていた。まるで、作品が紡ぎ出す物語の世界は現実でありながら現実ではなく、臉を閉じて初めて開かれるものなのだと感じているように感じられた。（hina）



個展「赤い 設楽知昭の絵」展 会場風景

上演の3週間ほど前から日本に滞在していたクラスカさんは、視覚に障害を持つ方々にインタビューを行うなどして、台本の推敲を重ね、名古屋の会場にあわせた物語を作り出しました。当初はフランス人俳優による上演も検討しましたが、最終的には日本大学芸術学部在校生と卒業生のお二人に加えて、演劇経験を持つ当館の職員が警備員役で参加するという形になりました。閉館後の会場内で行われたリハーサルでは、役者の動きを見ながら次々と演出を変えていくクラスカさんの姿に、「ははあ、演劇というものはこんな風に出来上がっていくのか」と門外漢の私は感心することしきりでした。上演は2回。20日の夕方と翌21日の午前中。いずれも開館時間内に行いました。事前の広報が十分にできなかったのも、果たしてお客様が来ていただけるのか心配していましたが、両日とも大勢の人で会場があふれました。とりわけ21日の上演では、訪問中のランス使節団の方々も来館され、終了時には「ブラボー」の掛け声が飛び交い、大いに盛り上がりました。上演を事前にご存知なかった一部の来館者の方々には、ご迷惑をおかけしてしまいましたが、このような刺激的な試みをいずれまた実現したいと思っています。（F）



イベントレビュー

ランス美術館展 会場内演劇

～マラー巡礼～

10月20日(金)、21日(土)

10月から12月にかけて開催した「ランス美術館展」は、名古屋市とランス市の姉妹都市提携を記念するもので、会期中の10月20日にはロビネ市長をはじめとするランス使節団一行が名古屋市を訪れ、河村市長との間で正式な調印式を執り行いました。その当日の夕方、開催中の展覧会の会場で、当館では初めての試みとなる演劇の上演会が行われました。

「マラー巡礼」と題されたこの芝居は、展覧会の出品作の一つ、ダヴィッドの《マラーの死》をめぐる物語で、ランス市在住の演出家エヴァ・クラスカさんが脚本、演出を手掛けています。クラスカさんは、昨年ランス美術館で同様の芝居を上演され好評を博しましたが、今回の展覧会が名古屋で開催されることを知り、是非日本でも実現したいと熱心なご提案をいただき、開催にこぎつけたものです。フランス革命の初期の指導者、ジャン＝ポール・マラーは、その過激な言動のために、反対派が放った刺客により暗殺されてしまいましたが、彼はもともとは眼科の医師でした。この芝居は、次第に視力を失いつつある男が、マラーを主題にした美術作品を求め、名古屋美術館を訪れるところから始まります。

イベントガイド

■特別展

シャガール展 三次元の世界

会期：2017年12月14日(木)～2018年2月18日(日)
料金：一般1,400円・高大生1,000円・中学生以下無料

マルク・シャガールは20世紀を代表する画家として世界的に有名ですが、60代になってから陶器や彫刻を精力的に制作していたことはあまり知られていません。本展覧会は、シャガールの魅力的な絵画とともに、彼が手がけた陶器や彫刻などの立体作品をまとめて紹介する、日本で初めての試みです。

【関連催事】

●記念講演会

日時：12月23日(土) 午後2時から
演題：「シャガールとは何者か？東欧ユダヤ人としてのモダン・アーティスト」
講師：園府寺司（大阪大学教授）

●作品解説会

①日時：12月17日(日) 午後2時から
②日時：1月27日(土) 午後2時から

講師：深谷克典（名古屋美術館副館長）
※記念講演会・作品解説会いずれも会場は2階講堂・参加料無料・先着180名

■常設展（特別展と同会期）

名品コレクション展Ⅲ（前期）

名古屋美術館のコレクションから厳選した作品を紹介します。

エコール・ド・パリ：シャガールとモンパルナス

メキシコ・ルネサンス：北川民次の版画に見るメキシコ

現代の美術：作品が伝える今を生きる私たちへのメッセージ

郷土の美術：描かれた女性イメージ

■コレクション解析学

日時：1月21日(日) 午後2時から
演題：「写真が教えてくれる歴史」
会場は2階講堂・無料・先着180名
作品：椎原治《流氓ユダヤー仮睡》1941年
講師：笠木日南子（名古屋美術館学芸員）

休館日は月曜日（祝日の場合は翌平日）、2017年12月4日(月)～12月13日(水)、12月29日(金)～2018年1月3日(水)、9日(火)、2月13日(火)です。詳しくは、美術館ウェブサイト <http://www.art-museum.city.nagoya.jp/> をご覧ください。（モサ）

展評

2017年10月 7 日(土)～11月 5 日(日)
第一会場 ギャラリーrin
第二会場 松下タネダギャラリー

「歌田眞介 常滑の思い出 原風景画展 滅びと再生 明日への希望」

東京芸術大学名誉教授であり、日本の油彩画研究でも知られる歌田眞介氏が、愛知県常滑の風景を描いた作品「常滑の思い出」が、このたび地元常滑にて展示された。歌田氏は愛知県立芸術大学の講義等で名古屋を訪れるたびに、美濃、瀬戸というやきものの町をめぐり、2008年に訪れた常滑で、「描きたい風景」に出会ったと記している。「[やきもの散歩道]には私が60年以上探していた風景が次々と現れた。長い間探し求めていた主題「滅びと再生あるいは希望」にぴったりの風景に出会ったのである」(展覧会図録より引用)

国内に現存する登窯としては最大級の陶米窯は、100号 3 枚の画面に朱から赤、茶へと暖かみのある色に包まれている。そして、画

展評

2017年 9 月 8 日(金)～10月29日(日)
岐阜県美術館

開館35周年記念 ナンヤローネNo. 3 BY 80s FOR 20s
1980年代発⇄2020年代行き

岐阜県美術館は1982年に開館しています。今年度開催の企画展のなかで「開館35周年記念」と付されているのはこれのみです。美術館を含めて展覧会を送り出す側の見識や判断がこのようなところにも表されているようです。

岐阜県出身で現代美術作家の日比野克彦氏を2015年に館長に迎えてより、岐阜県美術館ではこれまでよりもっと多くの人に美術の楽しさを知ってもらうため、教育普及活動を中心に事業の在り方を見直し改変する試みが行われています。開館当初より岐阜県美術館は教育普及活動を重視し、手堅く地道な活動が行われていました。そこに今日的な課題や手法を視野に入れた取り組みが加えられています。「ナンヤローネ」はそうした新しい試みに与えられた名称のひとつで、「なんだろうね」の岐阜ことばが由来となっています。「なにしようかね」にも受け取れます。

「開館35周年記念」と並んで「ナンヤローネNo. 3」が付されたこの展覧会、「No. 3」の意味するところは分かりづらいのですが、広く行われている名品類を集めた展覧会とは異なるだろうことは想像が付きます。岐阜県美術館が開館した1980年代を再考することを

BOOK

『震美術論』
(榎木野衣著 美術出版社 2017年発行)



日本は地震大国である。そのことは、この国で生活する私たちに嫌というほどしみこまされている筈だ。しかしわたしは、榎木野衣の「私たちは大震災の事後にいないのではないのだ。事前にいるのだ。」という言葉に、この当たり前のことが現実的にどういことなのか、はっと気づかされたのだった。私たちがいるこの場所では、台風、豪雨、津波、噴火など常に自然の驚異にさらされ、そのたびに多くの命が奪われ、人々が築いてきた生活の基盤が破壊され続ける。そうして起こる諦

家が屋根瓦の色合いに目を惹かれたという風景《常滑の思い出・宙》は、瓦の波の上に青い空がさわやかに広がり、「再生あるいは希望」という画家の思いが伝わってくるようだ。画家の目を通して見出された木造建築や窯場の風景は、乳白色の下地の上に、歴史も運命も静かに受け入れたかのようにその佇まいを見せている。

この展示は、地元の方々が中心になり開催に至った。画家は 8 年にわたり常滑に通いスケッチし写真を撮り、取材を重ねた。その画



歌田眞介《常滑の思い出・宙》2014年（撮影：木島隆康）

通して、身近な「これから」である2020年代とのつながりを考え、その在りようを予見しようという内容です。温故知新は目新しいものではありませんが、その営みを館長である日比野克彦というひとりの作家を参照項にして展開しているところに特色があります。要でありながら、おそらくここが好悪や評価の分かれるところでもあるでしょう。

分かりやすく親しみやすいものであるとは必ずしも言えないとしても、展覧会の在りようを問う野心的な試みであろうことは感じられました。企画展という手法が考案されたとき、そこには教育と普及の観点が含まれており、それ自体が革新的なものでした。来春、名古屋市美術館は開館30周年を迎えます。こうしたこととともに、開館当初に展開したより多くの人に美術の楽しさを知ってもらいたいという思いで実施された活動が思い出されました。この展覧会の狙いの通り、美術や美術館は今、転換期にあるのだらうと改めて感じさせられました。(み。)



会場風景

めに始まる忘却と反復の繰り返し。そうする以外になす術がない。ここにあるのは、その「効能」として生まれた感性によって形作られてきた文化。榎木はこの場所とそこに生きる人々の営みについて、現在進行形の「私たちの体験」を丁寧になぞっていく。それは、リアスアーク美術館の学芸員の方とのやりとりを含め、現実起こった現在の出来事としてとてもリアルに迫ってくるものだった。

1959年に名古屋地区を襲った伊勢湾台風を経験した赤瀬川原平と東松照明の被災と作品の関係にもスポットが当てられていた。これまで知られていた彼らの作品が、実はすべてを失い、自分の基盤が廃墟になった場にいたものだからこそ至った境地により生み出されたものではないかという。赤瀬川は、反芸術というより「つくることが阿呆らしくなってくる」リアリティから生まれた自然主義ともいえる境地から作品を生み出し、東松は失われて「ない」ものを撮影するために、記憶を弾いて別のなにかに置き換えて転移したと分析する。作品と作家が経験した被災体験との関係性から創作活動を見つめることで、これまで知られていたそれぞれの作家の作品展開により鮮やかに輪郭が与えられ、作家が生み出した世界が私にもストンと腑に落ちるようなリアリティが加わったように感じられた。大震災の事前でもある事後に生きているわたしは、榎木のこれらの言説を、近い未来に必ず起こるであろう大災害後に生きる自分への答えを追い求めるかのように食い入るように読み進めた。(hina)

家を常滑の町の人にはあたたかく迎え、そして交流が始まり、画布に留められた「当たり前風景」の魅力を再認識する。また画家も、迎え入れてくれる町の人々との出会いを喜び、楽しみ、心躍らせた風景を地元の方々に見てもらいたいと思い、人と人がつながっていった。

10月28日、イオンモール常滑内にあるイオンホールには、歌田眞介氏の話の間こうと

展評

2017年10月21日(土)～11月25日(土)
Gallery HAM(名古屋市千種区)

Nao Kawano Fujii “FLASHBACK”

ギャラリー内に設けられたコンクリートの土間には、赤や黄色に彩色されたガラスの破片が散在する。周囲の壁面には、青や黒のキャンバスが同じ高さで展示され、モノクロームの絵画の表面には、貼り付けられ、剥がされたような無数の円形の痕跡が確認できる。その痕跡とは、エアキャップと呼ばれる包装材料のそれである。また、土間には天井から緩く巻かれたエアキャップが吊るされ、その表面には、床に散らばるガラスの破片が、シリコンによって接着されている。

《FLASHBACK》と名付けられた今回の展覧会に作家は次のような言葉を寄せている。

「モノはそれぞれ記憶をもっています。作品を通じて隠れた記憶は掘り起こされ、それが再び強く印象として残るのです。」

そう言えば、撒き散らされたガラスの破片を見て、不覚にも夏の終わりに訪れた日本海の砂浜を思い出した。

「素材の持つ先入観を覆したい」という作家は、回収した空き瓶をスプレーで塗装し、金づちで割り、その破片をばら撒いた。アクションを伴う即興的な制作手法や即物的な表面を見せる絵画からは、その行為の雑然とした「痕跡」を見る印象は拭いきれないものの、

CULTURE, MOVIE, DRAMA & MUSIC

Culture

今年のノーベル文学賞に英国の作家カズオ・イシグロ氏が選ばれました。長崎生まれで両親は日本人というイシグロ氏の受賞は、日本でも大きく取り上げられました。彼の著書は40か国以上で出版され、日本でも高い人気を誇る作家です。この受賞決定にあわせ、10月 8 日にEテレにて2015年 7 月に放送された「カズオ・イシグロ文学白熱教室」が再放送されました。この番組は、来日した際に英文学を学ぶ学生に向けて行われたものでした。冒頭イシグロ氏が問いかけます。「なぜ、我々は小説を読みたいと思うのか。なぜ、我々は小説を書きたいと思うのか。…小説は本当に娯楽の手段以上のものなのか。社会にとって本当に重要なものなのか。」この問いかけをキーワードに、イシグロ氏が語り、学生が質問し、それに答えていく形式でした。話は20代で小説を書き始めた理由から始まり、「人間性や人間の経験に関する普遍的な真実について書く作家として認識される」ことを求め、代表作となる『日の名残り』が出来上がったこと、またイシグロ氏が用いる「記憶を通じて語る」手法や、物語全体に込められた隠喩の働きなど幅広い観点が取り上

いっぱいの人が集まっていた。話の後半、写真とともに描かれた風景について語られるたびに、私の周りでは「ああそうそう」「ここは・・・」と小声が聞こえてきた。集まった人々が作品に対し何らかの思いを感じ、共有する場にいることが嬉しく思えた。美術（作品）と社会のあり方はさまざまであるが、つなげるのは人であることを、あらためてじんわりと感じさせられる展示であった。(I.)

「先入観」を「破壊」し、「記憶」を「再生」するその手法は、それでも“絵画の復権”以後、絵画全盛を誇る当地に於いて最近あまり見られなくなったインスタレーションの面白みを思い出させてくれる。

展覧会終了後、撒き散らされたガラスの破片は、シリコンで固められ、キャンバスに接着され、「絵画」として復活するという。

「描くことで自分の中に新たな経験を残し、自分の記憶をよみがえらせる。その繰り返し作業である。」と言う作家が手掛ける、「記憶」の断片を貼り付けた絵画に対峙した時、記憶は再生されるのだろうか。また、その表面に像は結ぶのか。楽しみなどころではある。

Nao Kawano Fujiiは、1983年生まれ。2002年から2009年にミュンヘンの美術アカデミーで学び、帰国後、富山に於いて素材としてのガラスを学んだ。今春、名古屋に移住、今回が国内での初めての個展となった。[J.T.]



会場風景

げられ、冒頭の問いかけについて考えていきます。そして小説の価値は、そこに何等かの重要な真実が含まれているからであり、真実とは人間として感じるものだと思うと話します。歴史書やジャーナリズムでは状況は伝えられるが、小説は特定の状況で感じる気持ちを伝えられると。

何気なく見始めた番組でしたが、冒頭の刺激的な問いかけから作家イシグロ氏の言葉に引き込まれ、また現代社会に生きる書き手のひとりとしての静かな覚悟のようなものを感じながら見続けました。そして、冒頭の問いかけの「小説」を「美術」に置き換えて、「「美術」は本当に娯楽の手段以上のものなのか。社会にとって本当に重要なものなのか。」という問いかけが頭の中をめぐりました。イシグロ氏は最後に、小説で「心情を伝えること」を重要と考えているとあらためて語り、「この世界を生きていく人間として心をつかち合うことを大切にしている」と結びました。心に残る、意味深い言葉でした。(I.)



【編集後記】

今年もはや年の瀬。とはいえこの原稿を書いているのはまだ11月半ば。公園の木々はすっかり紅葉してまあ晩秋ではあるのですが、もう真冬並みの寒さです。体感気温のせいか、気分は年末。今年もいろんなことがありました。個人的には社会の変化を強く感じた年でした。株価が二十数年ぶりの高値を回復したとか、雇用率がバブル期に並んだとか、なかなか実感が沸かなかったですが景気のいいニュースが飛び交い、一方、世界中でテロが頻発、北朝鮮からミサイルが頻繁に発射されるといった不穏な出来事も多い一年でした。名古屋市美術館は 3 か月休館をして大々的に改修工事を行い、10月に再オープン、有料のイベント開催を試みるなど、よりよい美術館活動のために試行錯誤中です。私も今年新しく開館した富山県美術館に伺いました。子どもが来ることが前提に様々な設備が作り込まれ、デザイン的な常設展示室も設置されるなど、これまで培ってきた美術館活動の延長に社会の中に位置することをより強く意識していることが感じられ、時代が要請するひとつの新たな美術館像を提示されたように思いました。(hina)

アートペーパー第106号 発行日：2017年12月 1 日

発行 名古屋市美術館
[芸術と科学の杜・白川公園内]
http://www.art-museum.city.nagoya.jp/
〒460-0008
名古屋市中区栄二丁目17番25号
地下鉄<伏見駅・大須観音駅・矢場町駅>下車
Tel.052-212-0001 Fax.052-212-0005
休館日：毎週月曜日(祝日の場合は直後の平日)
年末年始
開館時間：午前 9 時30分～午後 5 時
祝日を除く金曜日は午後 8 時まで
※入場は開館の30分前まで

 Nagoya City Art Museum